



大学の国際化に思うこと

青山藤詞郎 Tojiro AOYAMA

慶應義塾大学 理工学部長



大学の国際化のためのネットワーク推進事業（グローバル30）に続き、スーパーグローバル大学創成支援プログラムがスタートしている。大学ランキングの世界トップ100以内を主な目標として、様々な取り組みが進められている。欧米の大学に比べて圧倒的に少ない留学生数の大幅な増員、外国籍教員の積極的な雇用、国際連携研究の推進など解決すべき課題が山積している。留学生を受け入れるための方策として、すべて英語によるカリキュラムの設置が検討され、これが実施されつつある。慶應義塾大学においても、経済学部やSFCが学部カリキュラムへの完全英語授業を導入しているが、多くの場合は大学院修士課程を中心としたものになっている。私が所属する理工学研究科では、修士課程に先端科学技術国際コースを設け英語のみによるカリキュラムを提供している。しかし、理工学部など理工系の学部では、化学実験や物理実験などを含む学生実験実習講義があり、学部授業の完全英語化へのハードルは高い。

大学の国際化についてもう1つ重要なことに、教員の国際化があげられると思う。近年、大学教員は研究推進のための競争的資金の獲得など、若手教員を含めて競争的な環境に置かれている。このことは決して悪いことでなく、世界トップクラスの大学においては日常のことではある。ただ、若手教員が外部資金の獲得や大型プロジェクトにおける共同研究などに力を集中する一方で、1年～2年のある程度一定の期間の国外留学や国外研究にアプライする数が減少しているように思える。若いうちに、異なる環境のもとで海外の若手研究者と交流をもち、将来の研究テーマについての構想を練る創造的な活動の機会を得ることは、重要なことと思われる。私の場合、助手に就任して間もなくドイツに留学する機会が与えられた。1年間の留学であったが、この間に得た様々な知識や経験と人間関係は、今でも国際活動の糧となっている。当時、研究所の同じ部屋で机を並べていた助手仲間が、今では方々の大学研究所のリーダー役になって活躍しており、様々な国際連携活動の場で親身になって相互に協力できる関係にある。国際学会で研究発表を行い、1週間程度であわただしく大学に戻ることがやむを得ない状況にあることは十分理解できるが、一定の期間、大学の仕事から離れ、異文化のもとで国外の研究者仲間との交流を深め、将来の研究推進への幅広い活力を養うことも大切ではないだろうか。

© 2015 The Chemical Society of Japan